

1000文字以内の
プロット
「リアル魔王は不整備」

20240403



エリー

目次

プロット	1
あとがき	3
1、ツルギの夢	4

プロット

未来の日本では、教える教育が廃れた。
読み書き計算は、端末を与えて、ゲームをさせることで覚える。
著作権が切れて解放されたドラクエ10が人気だ。
ツルギ少年12歳は、ドラクエ10をして、勇者に憧れる。
7歳になると小遣いを稼いで好きなものが買える。しかし棒切れを振り回して、野山を駆けて5年が過ぎた。
村には1年に1人だけ村人を交換する渡り制度がある。
4月にゼニマルというトルネコみたいな中年が来た。
7月初旬、ゼニマルがずだ袋を抱えて山に入っていった。
「冒険の匂いがする」
後をつけると河原で肉の塊を焼き始めた。
村単位で、作った野菜と米を使った質素な給食を食べる毎日。
ツルギ少年は、初めてみるうまそうなステーキに、欲望が押さえきれなくなる。ゼニマルが水を汲みに行った間に食べてまう。
1万の肉に、5万の慰謝料。合計6万を請求されたツルギ少年は、金を稼ぐ必要に迫られる。
しかも3月までに返さなければならない。13歳になる年に町の工場へ行くからだ。既に7月。誰がどこの家事を引き受けるか決まっている。狭い村で奪えば争いになる。困っていることがある人を探すようにゼニマルからアドバイスされる。
ヘチマというお調子者は、誰にも家事を依頼してない。
どうやら町の飲み屋に好きな女がいて、金がかかるらしい。
どんなプレゼントがよいか、一緒に考えて、家事の依頼を受ける。
しかし1つ1回につき30と安く、1日6つ以上を毎日引き受けると3月までに6万にならない。
困っていると、マキズシというひ弱な少年が、弟子になりたいと言ってくる。
高い岩からマキズシを飛ばせ、大ケガをさせてしまう。
責任を取って修行をやめる。
受け取った報酬も返す。
返済不能に。
工業勤めを終えたらもらえる30万で返すから、返済を待って欲しいとゼニマルに頼む。

「利子がつくもんでっせ」

「利子も払うから待ってください」

ゼニマルは許さない。

「あきません。30万までしか、村では持てないんでっから、損しますさかい。今年度中に返しておくんなはれ」

絶対絶命の危機に陥る。

ケガから回復したマキズシとコンビを組み、盆祭りに巻き寿司を販売する。

マキズシの腕で、飛ぶように売れる。

借金は返せたが、「リアル世界の魔王は不整備。やり方を思いつかないことはできない。つまり、やる人がいないことが魔王の正体。倒すべき敵」と去り際にゼニマルに言われて、政治と経済で結果を出すことを目指す。

あとがき

問題は、このタイトルにすると都会に出て金を稼いで、街の運営に携わり、改革する話を期待する。

自分より賢い人間は書けないため、わたしにはここまでが精一杯。

死ぬまでコツコツ資料を読んで頑張るつもりだが、書けない可能性が高い。

そこが問題。

ト・) 応援してくれる？

1、ツルギの夢

俺の名前はツルギ。12歳。

将来、勇者になる男だ。

ナナカマド村では、7歳から金を稼ぐことができる。

7歳の時、体力を見込まれて、山男に誘われた。

狩りをしながら、徒歩で原生林を見守る仕事だ。

俺は即答した。

「ノーだ。俺は魔王を倒す！」

すると山男たちは笑った。

「どこに魔王がいるのだ？」

痛いところを突かれて、顔が歪む。

ゲームと違って、魔王どころか、モンスターもない。

それでも俺は、勇者になるのだ！

魔王を見つける。

それから5年間、初期装備のこん棒代わりに、「いい感じの杖」を振り回してきた。

そして12歳になる。

来年、4月には町の工場で働く義務がある。

魔王は見つかっていない。

現実を突きつけられて、俺は焦っていた。

プロット「リアル魔王は不整備」20240403

著 ELYE

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
